
聖 おにいさん～狐と兄の謡い語～

皐月二八

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖 おにいさん〜狐と兄の謡い語〜

【Nコード】

N 6 4 2 4 N

【作者名】

皐月二八

【あらすじ】

ある日、天界で書類仕事をしていた天孤夜白輪廻はいきなり兄もろとも休暇をもらう。輪廻は久しぶりに下界、東京に向かったのだが――。とある兄弟と最聖コンビ達が織り成す、何の変わり映えもしない物語。

皐月二八の処女作より数十世紀後の話ですが、舞台は現代の日本です。聖人や神・天使などが大勢出演します。

ブログ：いきなりのような休暇（前書き）

こんにちは、皐月二八です。
のほほんと続けていきます。

プロローグ：いきなりのような休暇

「……はえっ？……もう一度言ってくれないかな」

「いや、だからお休みですよ。休暇、有給、バカンス、テイクアップ
レイク！」

「……なんか、全て微妙にニュアンスが違う気もするけど……つまり
休みがもらえるってこと？この御時世に？」

「ええ、それも最大10世紀の長期休暇です」

「それはまた……10世紀ねえ……」

天界で書類の山との激戦を終え、コーヒープレイクを満喫していた
私の前に、突然長髪の天使が空気も読まずにずかずかと入り込んで
きた。

四大天使の一人にして、天界でカウンセリングを担当する『癒しの』
ラファエルは晴れやかな笑顔で私——夜白輪廻やしろうんねを見つめる。人によ
っては、文字通りの『天使の笑み』なのだが、今の私にとってはた
だの『自分をカッコイイと勘違いしているナルシストの笑み』だっ
た。が、このいい意味でも悪い意味でも『癒し』をつかさどってい
るこの長髪天使は、私の嘲るような視線を完璧にスルーして続ける。

「あなた達のような神界からの派遣者ゲストのおかげで、無事に世紀末も
乗り越えることができました。これで、『地球』系統シリーズの全『世界』
が世紀末を乗り越えられたことになります。」

そこで、あなたや刹那さんたちにも休暇を与えるよう主は仰いました」

「ミカエルたちにもいつてあるの？」

私は四六時中テンションが高い『天使長』の顔を思い浮かべながら聞くと、ラファエルはストレートの長い金髪を揺らしながら頷いた。

「休暇ねえ……わかった。お兄ちゃんにも伝えとくよ」

「お願いします」

背を向けた大天使を尻目に、私はふと思いついたことを言った。

「そういえば、イエスとブツダもバカンスで下界に降りているんだよね？」

「ええ。イエス様とブツダ様は、日本国の東京、立川で休暇を取られておりますが？」

「そう……」

私はそう答えつつ、内心微笑んだ。

神界から、下級世界である天界の閑職へ逃げて数世紀経つ。それまでは、狭間の世界でのんびりと暮していたから、下界など数十世紀

ぶりだ。

ここの『地球』はまだ20世紀かそこらとお兄ちゃんが生まれた地球より時間軸が遅いが、それでも楽しめるだろう。

お兄ちゃんとのんびり旅行か……最高ではないか。

私はそう考えて、思わず笑い声をあげそうになったのだった――。

プロローグ：いきなりのような休暇（後書き）

一話一話を短くする予定です。

第1話：必然のような会話（前書き）

突然ですが、今作ではイエスとブツダの最聖コンビはあまりでませ
ん。

第1話：必然のような会話

私のお兄ちゃん、夜白刹那やしらせつなは元人間だが、今は創造神以上の力を持っている。

が、出自が出自だけにいろいろと差別云々な目にあつて——私がその犯人を殺して——まるで犯罪者か何かのように、狭間の世界でひっそりと暮らしてきた。

その後、ゼウスに頼まれ、天界で事務仕事を行っていた。正直、お兄ちゃんに職を与えてくれたゼウスには感謝している。

お兄ちゃんは、いつも通り天界では珍しいスーツ姿で事務をしていた。その変わらぬ——いや増し続けるかつこよさに私は恍惚とした表情を浮かべる。

「お兄ちゃん、休暇だよ、休暇」

「はん、休暇？」

私がお兄ちゃんに事の事情を説明した。

納得したお兄ちゃんに、私は下界へのバカンスを提案する。確か、人間時代に貯めていた日本円が、この『地球』では使えたはずだ。もちろん数世紀も遊んで暮らせるほどの額ではないが、こちらでの給料も換金すればいい。

「……おもしろそうだな。どこがいい？」

「取り敢えず日本国の東京にしない？そこに拠点を構えた後、いろいろと遊びに行けばいいよ。」

ここで家や資金を『創造』するのも無粋だろう。その点、日本はお兄ちゃんの出身国だし、住みやすい。

家はアパート1部屋で十分だろう。別に私はお兄ちゃんと常に密着していようが、裸体を見られようが構わない。むしろそうなることを望んでいる。かかってこいやである。私は天孤なので子供は作れないが。

確かイエス達は、部屋を借りる時の保証人としてマルコ（名前が一番日本人っぽいという理由で）を選んだらしい。

「……というわけで、マルコさんに頼んでみるね」

私は右手で拳を作りつつ、お兄ちゃんに近付き、唇を重ねた。お兄ちゃんの顔を見て、キスを自重するなど不可能だ。特に、二人きりの時は。

マルコが思ったよりもすぐに即答してくれて助かった。手荒くする必要がなかったのは大きい。拷問時間も案外馬鹿にならず、酷い時にはお兄ちゃんと話したりする時間すら削れてしまう。できるだけ避けたい事態だ。

私たちは手早く準備を進めると、さっそく下界へと向かった。交通費は1万円前後。最近は円高のあおりをまともに喰らって2万円を超すこともある。これが往復ならもつとかかるが、今回は長期滞在……約数世紀程なので安く済む。——のだが……。

「……………」

「安ッ……………」

天界での貯金のうち、半分ほどを日本円に換算した結果——3億円。そこに元から所有の日本円を足して5億円。

「……………ま、まさか2人で数世紀稼いだ金が、宝くじの一等レベルだとは……………」

「日本は外来者に厳しい国だねえ……………」

予想外の価格だ。まあ、別に贅沢三昧過ごすつもりで来たわけではない。

「とりあえず、立川に来た」

「えーと、イエスさんたちもここにいるんだよね？」

「ああ。まあよほどの事がない限り、会いに行ったりしないさ。向

こうは向こうで楽しみたいだろうし」

ちなみに今は夏真っ盛り。東京の夏は酷暑で知られる。お兄ちゃん
は見た目20代前半。ポロシャツにジーンズ姿。背丈は180センチ
ほど。ドラムバックを肩から掛けている。

私は見た目18歳。いつも着ている漆黒のドレス姿に麦わら帽子。
背丈は160センチほど。天狐の特徴である獣耳と9本の伸縮自在
の尻尾は相変わらず透明化している。

私は腰まである闇色の髪を弄りながら、お兄ちゃんの腕に飛びついた。

「落ち着けて……。ただでさえ、輪廻は目立つオッドアイなんだ
から」

私は艶やかな笑みを浮かべ、右は紅、左は翡翠色のオッドアイを細
めた。

「目立ってたって構わないよ。私はお兄ちゃんだけを見つめ、お兄ち
やんだけを愛しているのだから」

「相変わらずだな」

「何百世紀経とうと変わらない。私にはお兄ちゃんが全て。お兄ち
やんだけが大切」

私はきつぱりと言いつつた。

第1話：必然のような会話（後書き）

次回は引越した部屋へと向かいます。

第2話：騒動のような引っ越し（前書き）

僕が聖 おにいさんで一番好きなキャラはイエス。

その次がミカエルです。

あと僕は静岡出身山梨在住大学生なので、立川の事はよく知りません。

そのところはお願ひします。 といひか東京もほとんど行つたことありません。

第2話：騒動のような引越

結局、借りたのは立川の高層マンションとなった。フローリング洋風のかなり広いワンルームで風呂付、そこそいい物件だと思う。

ちなみに私たちの部屋は8階。個人的にはワンルームの方が良かったのでゴリ押しした結果だった。別個の部屋くらいは必要だとお兄ちゃんが言ったのだが、こればかりは譲れなかった。私は1秒でもお兄ちゃんと一緒にいたいのだ。

できれば布団も一緒がいいと言ったが流石に反対された。その代わり、時々一緒に寝てくれると約束してくれたので良しとする。

が、順風満帆とはいかなかった。

「……さ、寂しいねえ……」

「ああ……」

お兄ちゃんが頭を抱えるのを見て、私はため息をついた。

ダンボールから物を出し、片付けたのだが……広い。予想以上に広い。というより、物が少ない。

なにしろ、私たちは二人揃ってオフィスで寝泊まりしていた。おまけに神界や天界から持ち込んで、人間界でそのまま使えるものなどほとんどない。精々パソコンが携帯くらいだ。

家具・家電を置いて、まだスペースがあつた。デッドスペース未使用空間を除外しても、なんとも生活感のない空間に仕上がってしまった。

しかも私たち、私物が少ない。私たちにとっては私物＝服である。しかもその服ですら、この国や時代にマッチングしないもの（例えば天女さんからもらった羽衣とか、ちょっとした事情で拝借してきた『火鼠の衣』とか）もある。

「……よし、買い出し。ついでに食事をしよう」

お兄ちゃんの鶴の一声で、私たちは外に出た。

立川市。

東京都中部、多摩川の中流域（武蔵野台地）にある市。旧陸軍の飛行場が1922年に設置され、以後急速に発展。軍需産業都市となり、大戦中は一大航空機生産場となる。その後、飛行場一帯は米軍基地となり、かの有名な『砂川事件』が起こるものの1977年返還される。米軍基地跡地は陸上自衛隊駐屯地や昭和記念公園となる。現在は電気機器、輸送用機器工業などが行われている。人口約17万、面積約24平方キロメートル。

長ったらしい説明は置いて、私たちは立川にあるファミレスで昼食をとっていた。取り敢えずお兄ちゃんはノートPCと本色々を購入した。

ちなみに私はファッション雑誌数冊。ついでに言うと、私は化粧はしない。年齢や身長などは自由自在だし、常に最高の美貌コンディションを保っていられるからだ。

「お兄ちゃん、よくコーヒー飲めるねえ……」

「ああ、昔から輪廻は紅茶か緑茶だったものな」

「あの苦さがどうも駄目だよ。……お茶は玉露が最高、ダーズリンが2番目かなあ」

今飲んでるのはドリンクバーの紅茶、アップルティーだ。私は昔からコーヒーが駄目で、特にブラックなんて飲めたものではない。

「昔はイエスさんたちとよくコーヒーブレイクしていたものだよ」

「ああ、その度になぜか漫才が始まって、爆笑したイエスさんにコーヒーを葡萄酒ワインに変えられていたもんねえ」

静かに苦笑する。

お兄ちゃんは酒が苦手だ。1日ワイン一杯が限界だった。対して私はいくら飲んでも酔わない。

もともと私としては、酔いつぶれたお兄ちゃんはカンタンに襲えるので有り難い。口移しで酒を飲ませれば、数回でダウンしてしまう。その後存分に愛でるのが私の常套手段だ。

ちなみにイエスは爆笑したりする度に水——なぜかこの水にお茶やコーヒーが含まれる——をワインに変える。結果、イエスが酔ってさらに爆笑してより大量のワインが出来上がるという悪循環が発

生する。

「じゃあ、そろそろ出ようか」

「うん」

日も暮れてきたところだし、今日はそろそろ帰るとしよう。

第2話：騒動のような引っ越し（後書き）

次回は夕食・入浴シーンです。

第3話：緻密のようなアフターヌーン（前書き）

ネ、ネタが浮かばない……。

自分の中では、刹那は冷静で理論家だけどツツコミもできる男です。

第3話：緻密のようなアフターヌーン

目覚めた人ブツダ。

神の子イエス。

仏教とキリスト教の開祖であり、数多の人を導き、救った人間である。

彼らは天界ではかなりの地位を持つが、あくまで『聖人』である。

天使や天道衆などよりはまだ人間に近い。むろん、『奇跡』を起こせたり、死んでも甦生が可能など十分人間離れしているのだが、背中に翼をもつ天使や三面六手の阿修羅に比べれば、まだ（身体的に）人に近い。

さて、私こと夜白輪廻やしろくわんねは『天孤』。透明化した獣耳と伸縮自在の九尾を持つ、ありとあらゆる神獣の中で最高位の神獣、しかもその特別変異である。立場は『神獣』なので神より低い、一応は創造神すゐじうしんより力は強い。

そして、『神を殺せる神』が夜白刹那やしろせつなお兄ちゃん。当然、その力は強い。本来なら、イエスやブツダよりもよほど強い存在だが、今は天界に左遷状態だ。

ここまで長々と説明したのだが、結局何が言いたいのかというと、私たちは『人外』、それも『人』というカテゴリーからかなり逸脱した部類に入ることだ。

要するに、本来なら食事など必要ないし、病気にもかからないので衛生管理上の観点からすれば入浴も必要ない。

しかし、お兄ちゃんは元人間。そして私は『娯楽』という意味での食事や入浴に慣れているので、問題はない。そもそも私はお兄ちゃんの作る最高級の食事に慣れ過ぎてしまった。そんなわけで今も食

事を堪能しつつ、

「あー、おいし」

「喜んでくれてうれしいよ」

お兄ちゃんとの空間を満喫しているのだ。小さいころから1人暮らしだったお兄ちゃんは料理がとても上手で、私がお兄ちゃん至上主義であることを除いても、店開いてしかもミシランいけるレベルなのだ。

実は私自身料理ができるのだが、お兄ちゃんのそれと比べると『普通』すぎて泣けてくるのであまり作らない。が、包丁さばきには自信がある。牛肉、魚肉、龍肉、人肉なんでもござれだ。

まあ、人肉など食べたことはない。お兄ちゃん以外の人間を、体内に入れるのを拒んでいるからだ。人肉を斬り刻んだ事なら無数にある、というだけのこと。

ちなみに今日のメニューは鍋だ。牡丹鍋。

前に、お兄ちゃんに歯向かった猪を刻んで作ってみたら意外に——お兄ちゃんに逆らった塵芥ちりあかのブンザイで——おいしかった。ちなみに刻んだ猪をそのまま持ちかえたら、テントを張っていたお兄ちゃんが卒倒したので、次からはエモノの遺体は『空間』に放り込むようになった。

あと、エモノを解体する役もお兄ちゃんに頼まれた。人間の力で猪やら熊やらの解体は骨が折れるらしい。

私なら、尻尾か爪でやれば1秒とかからないのだが。

あと、私は牡丹鍋って入れた猪の血肉によって鍋が紅の牡丹のようになるから牡丹鍋というと思っているが、どうなのだろうか？ 実際

の牡丹鍋って紅くないし。

「お兄ちゃん、久しぶりに一緒にお風呂入ろうよ」

「……は？」

ドサリ、という音とともにお兄ちゃんは本を落とした。

「そんな広くないだろ？」

「密着すればいいじゃない」

「いや、そんな事も無げに言われても」

「だって昔はよく一緒に入ってたじゃん」

「いや、あの頃は子供だったし、お前も子供姿だったし、第一最初の頃は狐の姿だったじゃないか」

「私にとつてはどの道お兄ちゃん裸だったし……」

「いや、お前の今のスタイルまずいから」

「まずい？何で？いつもこの姿でまぐわいしてるじゃない」
スタイル

「まぐわい言うな」

「じゃあ、セツ……」

「そおおおおおおおい！」

「あうっ！」

脳天にチョップを食らい、私は（いろんな意味で）悶えた。涙目になりながらお兄ちゃんを睨む。

「いつも言ってるだろっ！そういうことを口にするな」

「お兄ちゃんにしか言わないのに……。いいじゃない、なにも襲ってくれなんて言わないよ。私はお兄ちゃんにお風呂の中でキスして胸を揉んでほしいだけなのに……」

「……十分高望みな気がするが……」

「……いつになったら慣れてくれるの？もう何十世紀も一緒にいて、とつくの昔に私を伴侶にしてくれているのに……」

「それとこれとは話が別だよ。どうしてお前はこつも積極的なんだ……」

「お兄ちゃんが草食、というか絶食なのがいけないんだよ。セックレスなんてヤダもん。私の辞書にセカンド・バージンなんて言葉

はないんだよ」

「自分の理念と現代の男女現象及び女性概念を結び付けるアクロバティックな主張はやめなさい」

「……仕方がないなあ、こうなったら……」

私はそう言つと、『空間』からワインボトルを取り出した。最高級のロマネ・コンティだ。

それを見て、お兄ちゃんの顔から見る見る血の気が引いてゆく。小動物のように怯えるお兄ちゃんを見て、私は鷹のような目でお兄ちゃんを射抜く。

「おい、よせ。……それは、まずい……」

「ふふつ。……お兄ちゃんが悪いんだよ？……私は、狂つてもいいほどお兄ちゃんを愛して、求めているのに……してくれないから」

私は妖艶な笑みを見せると、ワインをそのまま一口、そして、お兄ちゃんに超高速で近付き、唇をお兄ちゃんのそれに押し当てた。同時に中の液体を流し込む。

「んっ……ふむう……ぐっ……」

単純な力なら、私の方が上だ。お兄ちゃんはおくまで『神を殺す』

ソンザイであり、私は『神を超える』神ではないモノなのだから。やるつもりはないが、私の手にかかれればお兄ちゃんだって瞬殺できる。

豊満な胸をたつぷりと押し当てながら、私はその行為を何度も何度も繰り返す。ワインを口に入れては、お兄ちゃんの口内に流し込む。そして、お兄ちゃんの舌を丹念に味わう。

その甘美すぎる味に狂喜乱舞したくなる。

しばらくすると、お兄ちゃんは完璧にダウンした。私はそんなお兄ちゃんを抱きしめ、お姫様だっこの逆ヴァージョンでお風呂場へと連れて行った。

へ口へ口になってうめき声を上げるお兄ちゃんに微笑みつつ、今日も一日楽しかったことに感謝し、これからのことに胸を躍らせた。

第3話：緻密のようなアフターヌーン（後書き）

……すみません、お色気シーンは無理です。
全く想像できない……。

第4話：待機のような再会

部屋に1人でのんびりだらけていると、チャイムが鳴った。

「はい」

私は特に不審に思わずドアを開けたが、開けた瞬間仰天した。いや、別に予定外の人物の来訪がサプライズだったというわけではない。寧ろ、何時になったら来るのかとお兄ちゃんと頭を捻っていた。

サプライズだったのは、来訪者——彼女の服装だった。

「……なんで執事服なの？煌月……」

「……問題ありますか？輪廻」

夜白煌月^{やしろ いたつき}は、そう言って首を傾げた。

この、身長180センチを超える細身、だが凄くスタイルの良い女性^{キリン}は夜白煌月。お兄ちゃんの妻の1人で、お兄ちゃんの部下でもある準最高位神獣『麒麟』である。白に近い水色のセミロングの髪は透き通るほど輝き、瞳はサファイアのような美しさを誇る。肌も私と同じように白く、お兄ちゃんと2人きりの時以外は無表情なのを差し引いても美女だった。

そう、美女。私と張り合えるくらいの美女だ。

そんな美女は唯でさえ目立つというのに、着込んでいるのは男物の

執事服だった。黒を基調とした、本格的な執事服だ。

恐らく見た者の十中八九は、ドラマか何かの撮影か、或いはこう思うだろう——コスプレと。

が、似合う。似合っているのだ。私より豊満な胸を持っているのだが、どうゆうわけか異様に似合う。そのせいで、余計に目立つのだ。

しかも、私と違って煌月は、自身が目立つことに気付いていない。

いや、気付こうとしてもしていない。

煌月は真面目で誠実、冷静沈着なのだが——私と同等か、それ以上のお兄ちゃん信者なのだ。

煌月にとって、世界の全てはお兄ちゃんであり——私を含む家族を除き、他の全てはどうでも良いのだ。

いや、わたしもそうなのだが、煌月はその度がちよいと行き過ぎている。無視するとかそういう問題ではなく、本当にいないかのごとく振舞うのだ。恐らく彼女にとって、お兄ちゃん以外など風景も同じなのだろう。だから、他の人間がどんな反応をしても気にもとめない。というか、記憶していないし認識すらしていない。

が、その弊害がこれだ。

「……ずっとその格好でいたの……」

「ええ、渋谷から立川まではずっと。ゲートの位置が渋谷だったの
で……」

私を見据え、というか見下ろして淡々と無表情で説明する煌月。たぶん、自分の周囲に千発以上の核爆弾が落とされても片眉一つ動かさないだろう。

彼女はお兄ちゃんと話すときは、それなりに笑ったりするのだが。

煌月は現在、神界で仕事をしている。

正確に言うと、神界が確保した人質だった。もともと、煌月1人で神界を滅ぼせる十分な力を持っているのだから、人質とするには強すぎる。

が、こうでもしないと神界は安心できなかったのだ。ポーズ、単なるパフォーマンスだったとしても。

そのため、天界で仕事をしている私たちとは直接会える機会が減ってしまった。

当の煌月も不満だったのか、最初はかなり機嫌が悪かった。具体的に言うと、目に入った神を片っ端から蹴り飛ばすくらい。

雷の速度の蹴りを喰らい、大抵の神は一回死ぬ。その内、10000回も1000000回も殺される神が出てきて、結局お兄ちゃんが諫めることになった。

煌月はお兄ちゃん命令には絶対なので、渋々怒りを収めた。

「……執事服で来なくても……」

「……大抵はこれでしたが？」

煌月は、大抵は黒スーツか執事服で過ごしていた。もともと執事服を着る時は、お兄ちゃんと会っている時くらいだった。

「……まあ、いいけどさ。お兄ちゃんは暫くしたら来ると思う」

私がそう言つと、煌月は静かに頷いた。

第5話：連続のような来客

煌月を招き、部屋に戻って、

「あら、煌月様もいらしていたのですね」

「あ、どもです」

私はもう一度仰天した。

床に正座し、1人は抹茶を、もう1人は紅茶を飲んでいた。

振袖を着た、背の中ほどの長さの白髪に瑠璃色ラリスラスリの瞳の長身・煌月にも劣らぬ豊満な胸を持つ方は夜白硯璃やしろ すずり。

スーツを着た、金色のショートヘアに黄玉色トパーズの大きい瞳を持つ背の低い方が夜白黄染やしろ きでめ。

2人とも、とある『世界』を管理している神工生命体で、お兄ちゃんの娘——『娘達』ドーターズの一員だ。お兄ちゃんが造った神工生命体だから、お兄ちゃんの娘となり、私の姪となる。

それはともかく。

「どうしたの？連絡はなかったけど」

「連絡を入れたら、妹達にバレますから……」

私が尋ねると、硯璃は口を隠して優雅に笑う。
ちなみに硯璃は長女、黄染は5女だ。

それにしても……。

「……何でそんな格好かなあ……」

「あら、いけませんか？」

硯璃が首を傾げ、自身が着ている藍色の振袖を見下ろした。同じように黄染も、怪訝な顔でスーツを見下ろす。

「問題無いじゃないすか」

「そうですね……御父様も見惚れる程の、美しき美しき服装ですわ……いえ、そもそもわたくしのこの振袖、というよりわたくし自体が御父様専用なのです。そうですね、まずはたつぷりと視覚で味わってもらってから、次に匂い、肌触り、唇、胸、身体の順番で……」

「……いや、もういいよ。というかこの中でお兄ちゃん専用じゃないヒトなんていないし」

「そもそも、貴女が言えることですか？オッドアイ虹彩異色の貴女が」

「うつ……」

煌月に言われ、反論できなくなった私は口を閉じる。お兄ちゃん以外の有象無象になど興味はないが、それでも美人で目立つという自覚くらいはあるのだ。

…… 自覚するだけで、気にはしないが。

まあ、私と煌月はお兄ちゃん至上主義者だし、硯璃と黄染も超弩級ちやうとうきゅうきゅうのファザコンだから問題ないだろう…… 有象無象共が騒ぐだけで。羽虫が五月蠅いのなら潰せばよい。塵芥ちんがいが来たら消せばよい。

「あ、そうそう」

突然ポン、と手を叩いた硯璃は、持って来たのであろう紙袋（なぜかSHIBUYA109の）からナニカを取り出した。

「これ、骸亜がいあからの御土産です」

それは、ワインボトルだった。

ちなみに骸亜は3女だ。

「え？ 骸亜には行くことを伝えていたの？」

「いえいえ、唯、たまたま道中に出くわしたっす」

どうやら黄染も会っていたらしい。

「…………どうする？」

「酒を飲むなら……………」

「刹那様に飲ませて……………」

「いただきますわ」

上から、私・黄染・煌月・硯璃。

「…………よし、お兄ちゃんが来るまで仕舞ってこつ」

「わかりましたわ」

いそいそと紙袋（SHIBUYA109の）にワインボトル（食後デザート）を戻す硯璃。

「…………それで？…………お父さんは何時帰ってくるんすか？」

「多分そろそろだと思っけど……………」

「先に夕食の支度でもしましょうか？」

「んー……スペースが足りないなあ。3人はともかく5人はワンルームには厳しいよー……」

「じゃあ外食そとつすか？

ていうか泊るつもりで来たんすけど……そのままホテルか旅館にでもゴーっすか？自分、銭湯はダメっす」

「んー……泊ることくらいならできるでしょうけど……風呂は……んー……一緒は無理だねえ……下界に来てまで『空間』使っなってお兄ちゃんも言ってたし……」

「資金なら問題ありませんが」

「あ、わたくしたちもです。おこづかいを換金してきましたわ」

「自分、円高にはビビったっすけどね……まさか自分の10年分の給料こうかいが一千万円にもならないとは……ビックリっす」

「まあ、黄染。贅沢というものですわよ……御父様と同じ空間にいるというのに、お金を望むなど高望みですわ」

「ん……そっすね」

結局、お兄ちゃんが帰ってくるまで待つことになった。

第5話・連続のような来客（後書き）

次回、5人のお出かけ編です。

第6話：来客のような安寧（前書き）

予定を変更して天界編その1です。

第6話：来客のような安寧

「「困りましたね」」

天界の入り口付近、『天国の門』というそのまんまなネーミングが付けられている門の付近に、二人の少女が歩いていた。

二人とも白髪碧眼で、長い髪をストレートにしている。体格は細めで、背は低い。

顔も体格も服装も全く同じで、見分けがつかない。歩調や仕種、視線の動きまで一緒である。違うところと言えば、右の少女は右頬に、左の少女は左頬に、黒い十字架の刺青が彫られていることくらいだろう。

ちなみに服装は、二人揃って黒のスーツを着込み、紅と黒のストラップのネクタイを付けている。

右が夜白在唯、左が夜白無全。夜白刹那の娘の六女と七女である。

「ここにいらつしゃると推察していたのですが。六女は的を外しましたでしょうか」

「この場所におられると推測していたのですが。七女は見当はずれでしたでしょうか」

全く同じペースで異口同音の言葉を吐きつつ、双子姉妹は互いを見やる。そして同時に再び、『天国の門』へと視線を移した。

天国の入り口としては妙に小さく、威厳にも迫力にも壮大さにも欠ける門が、“天界三大ガツカリ名所”と呼ばれるモノに入っていることは、恐らくこの二人は知らないのだろう。

門の前には受付があり、二人分の椅子が置いてあるのだが、今は誰もいない。セキュリティが甘いと判断するか、来るもの拒まず（実際には拒むが）の天国の寛大さに驚嘆するべきかは意見の分かれるところである。まあ、天国に盗みに来る者などいるわけないし、したらどうなるかは大体想像がつくだろうが。

「どうしたものでしょうか、七女」

「如何したものでしょうか、六女」

まあそんなことは、せつかく遠路遙々敬愛する父に会いにやってきた双子姉妹にはどうでもいい話しなわけで。

父がいない天界など、彼女らにとっては何の価値も無いわけ。かといって、ここを発とうにも、行く先のアテも無いわけで。

「やっぱり長女を探しましょうか」

「詰まる所長女を探しましょうか」

選択肢などほとんど無い。

夜白刹那は今、天界に左遷状態にある。その時、娘達は刹那との繋

がりを一時期断たれており、感知することができなくなっているのだ。腹立たしい事実だが、今憤怒したところでどうにもならない。

しかし長女で28人姉妹のリーダーである硯^{すずい}璃だけは、刹那の居場所を察知できる。

ここの住人に聞いてもいいのだが、この双子姉妹、刹那を筆頭とする身内以外は誰も信じない。ドが付くほど疑り深い性格なのだ。

しかし、こんな時に限って

「あれ、双子ちゃんじゃあないスカ」

そういう連中と出くわすものだ。

受付の席に座った聖ペトロと聖アンデレに話しかけられた基本無表情の双子姉妹は、全く同じタイミングで（心の中で）舌を打った。使徒（しかも聖人）相手に舌打ちできるのは彼女達28姉妹くらいである。

アンデレとペトロの二人の聖人からやけにフランクに接せられ、コミュニケーションが得意でもない在唯と無全の双子姉妹は、見た目は普通中身はくたくたの状態で天界から降りた。

剎那達の居場所が分かったからいいものの、これで無駄足だったらキレていただろう。

「まさか有給を取っていらっしやっただとは、好都合です」

「よもや休暇を御取りでになっていたとは、予想外です」

下界への交通費を確認しつつ、双子姉妹はうつすらと――電子顕微鏡でも使わないとわからないくらいの変化だが、笑顔で顔を見合わせた。

「御奉公は下界でいたしましょう、父様」

「御奉仕は地上にて捧げましょう、父様」

そう呟き、双子姉妹は立川へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6424n/>

聖 おにいさん～狐と兄の謡い語～

2011年6月20日17時38分発行